

A Study on Several Words in HEKE-MONOGATARI

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/487

『平家物語』等に見える「夢(を)見す」「議勢」の二語彙について

山本 一

A Study on several Words in HEKE-MONOGATARI

Hajime YAMAMOTO

1 「予告する」意味の「夢見」

『平家物語』巻一「殿下乗合」に、平清盛が摂政藤原基房への報復を行った後、清盛の命令を実行した侍たちに対して、平重盛が非難を口にする場面がある。

たとひ入道いかなるふし議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。

清盛(入道)が報復を命令した時点で、そのことを重盛に知らせなかった点を問題にしていることは、文脈から明らかであろう。もし事前に知ったならば、自ら清盛を諫止したであろうという含みを持つた発言である。右は、岩波書店刊日本古典文学大系(底本は龍谷大学図書館蔵覧一本)一二〇頁によるが、歴代本(角川書店刊貴重古典籍叢所収複製による。括弧内は振り仮名)では、

縦(タトヒ)入道如何ナル事ヲ下知シ給フト云トモ重盛ニ夢ヲ可レ見スニテコソアレ

延慶本(汲古書院刊複製による)では、

設ヒ入道イカナル不思議ヲ下知シタマフトモ争カ重盛ニ夢ヲバミセサリケルソ

のようになっていいる。細部に異同はあるが、清盛の命令あるいは意図を重盛に「知らせる」という行為を、「夢を見す」という言い方で表現している点は共通する。こうした用法は『平家物語』の他の箇所には見られないようであるが、『源家長日記』建仁三年大内花見の箇所(石田吉貞、佐津川修二『源家長日記全註解』有精堂、一七三頁。朝日新聞社刊『冷泉家時雨亭叢書』第四十三卷一三三頁)に、

さもまいりぬべきはの人々に夢見せにつかはす

という例が見いだせる。これは、和歌所の寄人たちがつれだって大内裏の花見をしたことを聞いた後鳥羽院が、翌日自らも花見をすることを思い立ち、供奉できそうな人々に伝達する場面である。「前もつての知らせ」のような意味で「夢見せ」が使われていると見ら

れ、「夢見す」が「予告する」の意味を持ち、動詞としても名詞化した形でも使われる、熟した表現であったことが推測できる。

同様の用例が、寺院内の一見特殊な用語にも見いだされる。永村眞「『法会』と『文書』——興福寺維摩会を通して——」（佐藤道子編『中世寺院と法会』法蔵館一九九四年、のち『中世寺院史料論』吉川弘文館二〇〇〇年に収録）、高山有紀『中世興福寺維摩会の研究』（勉誠社一九九七年）、泉谷康夫『興福寺』（吉川弘文館一九九七年）などの研究・紹介により広く知られるようになった、興福寺維摩会の堅義の次第についての故実の中に見える、「夢見」である。

指名された問者は、堅者と同様にあらかじめ探題のもとに参上し、自らが問答すべき問題を密かに知らされるが、この儀式は「夢見」と呼ばれた（『東大寺雑集録』巻二二）。出世奉行は探題の命をうけて、堅者の提出した「論義題」の因明・内明各一問ずつ記した「夢文」（「夢状」）を、堅者が五人であれば二十五通作成し、公文所において「袖二引入テ給之、無一切言」との所作によりこの「夢文」を問者に手渡す（「尋尊御記」）。また精義も同様に「夢文」を渡される。この「夢見」という作法は、本来は堅義の場に臨み堅者が読み上げる「義」について、即興で問者は「問」を試み、精義は問答の内容に講評を副えて判定を下すべきところを、事前に問題について稽古を積むために、密かに「論義題」を耳打ちされたことを暗示している。

（前掲、永村眞『中世寺院史料論』二二六頁）

このように、堅義における問題の内々の事前予告が、「夢見」と呼ばれていた。

『平家物語』や『源家長日記』の「夢見す」には「内々」というニュアンスがあるであろうか。前者では、清盛には知られないようにして重盛に内々に連絡するということであれば、「内密」の含みもあるといえるかもしれない。後者の例は、すぐ後の箇所「しひて仰せありつれど」とあるように非公式の（もろろん近代語における「秘密の」ではない）御幸であり、したがって「人々」への知らせも命令のかたちをとらず、内々の通知のかたちをとったものとするれば、やはり類似的のニュアンスがあることになる。いずれにせよ、三例が共通の根を持つことはまず間違いないと思われる。寺院の特定の場面で使われていた用語が、次第に世俗社会に広がって、一般的な意味を持つようになったのか、それとも「予告」の意味の「夢見す」の語が一般社会で定着してから後、興福寺で故実の名称に用いられるようになったのか、今のところいずれとも決めがたい。今後、寺院関係の資料などからもより多くの用例が見出されれば、この語の成立や性格が明らかになるかもしれない。また、興福寺以外の寺での類似の故実の有無やその呼称にも、注意する必要があるであろう。

語の成り立ちから言えば、古代・中世を通じて夢告による予言が広く信じられていたところから、「夢を見せる」が将来についての情報を与える意味を持つようになったのであるとは、誰しも思い至るところであろう。しかし、むしろ現時点で確認しておきたいのは、遅くとも鎌倉時代初期には、「夢(を)見す」は、いちいち「夢」という語の意味を意識しなくても、ただちに「予告する」の意味で理解されるだけの、語(句)としての自立性を備えていたという点である。

とある(三弥井書店刊『歌論歌学集成』第十卷一四九頁、風間書房刊『日本歌学大系』第五卷一二四頁)。これは「或」の見解に対する評であり、「議勢」は「或」の「議論の趣旨」を指すのである。これらは、前掲『日本国語大辞典第二版』の意味項目では③に属するとされるのであるが、本来的な語義のうちに、この「議論」という要素が入っていると考えることはできないであろうか。

『弁慶物語』諸本のうち、『室町時代物語大成』に翻刻された、国立国会図書館蔵元和七年写本では、弁慶が鍛冶屋で太刀刀を鍛えさせ、傍らで仕事ぶりを監視する場面が次のようになっていた(『室町時代物語大成』第十二、二〇二〜二〇三頁、括弧内は振り仮名)。

弁慶、太刀刀の金をみる間、すこしのきずもあらば、きたいなをさせて、傍(ソバ)にて、儀勢を始たり
本より、内典外典の、学匠なる間、唐土、天竺、日本の物語、
虚言(ソラコト)、実(マコト)、云程に、弁慶が物語に、
きよほれて、送(オクル)月日の、数をへて、百余日にぞ、打出しける、太刀刀、心も言も、およばれず

室町時代物語のつねとして『弁慶物語』にも諸本の細かな異同が多く、この場面についても、新古典文学大系所収本(チエスター・ビーティー図書館蔵本)をはじめ他の公刊された本には「儀勢」の語は見えないが、こうした異同は、それぞれの本の独自の表現として理解されるべきものであろう。元和七年写本は、立て続けにさまざまな知識を動員して「物語」することを、「儀勢」と表現している。これはおそらく寺院社会内で、意見を述べ議論を展開する行為をこのように呼んだことの反映であろう。

寺院関係の資料としては、『続天台宗全書論草1』に翻刻されて

いる十四世紀成立の『廬談』に、用例が見える。読み下しの形で掲げると、

誠二是レ一流ノ義勢也。(二六頁上段)

北谷ノ義勢ハ権教ニ限ると云ふ也。(二七三頁下段)

などで、流派の相伝により解釈が異なる問題について、特定の流派の見解を指す場合に「義勢」を用いているように見える。

右に挙げてきた例は、一見すると意味もさまざまようであるが、「口頭で議論すること」を指す場合、「議論の趣旨」を指す場合、にほぼ整理できる。両者は重なる部分があつて、具体的な意味が勝つ場合は前者、やや抽象的な意味が勝つ場合は後者で、両者を含めて一語と見てよいと考えられる。表記もさまざまであるが、この時代の漢字表記の一般的なあり方から考えて、用字の差異をあまり重く見ることはできない。同一語の表記のゆれと考えておきたい。最初に示した『平家物語』の場合は、「(平家を倒すという)趣旨の議論を口先でするばかりで」と解釈でき、右に示した二つの意味合いをともに含んでいると考えるとよいのではなからうか。

『吾妻鏡』の用例は、建暦三年五月二日のいわゆる和田合戦の条に見られる。北条義時の留守宅が包囲される箇所である。

相州雖被候幕府、留守壮士有義勢、各切夾板、以其隙為矢石之路攻戦、義兵多以傷死(新訂増補国史大系本)

なお貴志正造訳注『全訳吾妻鏡』(新人物往来社)の訓読文では、

相州幕府に候ぜらるといへども、留守の壮士等義勢あり。おの

おの夾板を切り、その隙をもつて矢石の路となして攻め戦ひ、
義兵多くもつて傷死す。

のように、「有義勢」を上の方に続けているが、版本(寛文版)の
訓点を参考にすれば、

相州幕府に候せらるといへども、留守の壮士等、義勢あつて、
おのおの夾板を切つて、その隙を以て、矢石の路となして攻め
戦ひ、義兵多く以て傷死す。

と下に続けて訓読できる。本稿で見えてきた他の用例に引き寄せて解
釈すれば、戦闘を想定していなかった「留守の壮士等」が、臨時に
相談して板を用いて防戦することにしたのであり、「義勢」は「議論
(する)」の意味に連続することになる。

『太平記』には、西端幸雄・志甫由紀恵『土井本太平記本文及び
語彙索引』(勉誠社刊)によって十箇所用例が検出できる(以下引
用本文は同書により、参考として日本古典文学大系本により章段名
を示す場合がある)。

四五百騎集まりたれども、皆ただ呆るるばかりにて、さしたる
擬勢も無かりけり。(巻八・三月十二日合戦事)
ただ呆れたるばかりにて、ここかしこに群立つて、落ち支度の
他は擬勢も無し。(巻九・六波羅攻事)

前者は、摩耶合戦の勝利を楽観していた六波羅勢が、想定外の赤松
勢の入京に混乱する場面。後者は、六波羅に立てこもったものの戦
意をうしなっている場面。いずれも、前後の状況からは「威勢」
「気力」などの意味をあてても十分理解できるようにも見えるが、

「さしたる…も無かりけり」「他は…も無し」という表現に注目す
ると、「(勝つための)考え、工夫、相談」の意味ではないかと考
えられる。戦闘への意欲をうしなっているという描写にかわりはな
いが、単なる感情的な戦意ではなく、戦術・戦略についての思考力
をも失っているという含みがあると見られる。

日頃の擬勢尽き果てて、いつしか小水の魚の泡に息づく体に成
つて、(巻十一)

この春の敗北に懲り恐れて、諸卒敢へて進む擬勢無かりけると
ころに、(巻十六)

ただ惘然たる他は、さしたる擬勢も無かりけり。(巻二十)

などもほぼ同じ用法で、「戦おうとする考え、方策」と捉えること
ができる。

延び延びとしたる評定のみあつて、誠に涼しく聞えたる擬勢
は、更に無かりけり。(巻十九・奥州国司頭家卿並新田徳寿丸上
洛事)

これは「戦意の表明」と解することもできるが、場面が評定である
から、「議論、意見」の意味に基づく用法と見ることができると
思われる。

はやく当機不交の擬勢を成して、速やかに義を見、すなはち勇
の歓声を聞かん。(巻二十四・依山門噉訴公卿詮議事)

延暦寺の牒状の中にあり、「不交」は「不拘」が本来であろう。状
況を見て適切に考えをめぐらすことを、「擬勢を成す」と言ってい
ると考えられる。

師直・師泰、擬勢はこれまでなれども、さすがに押し寄する事は無く、いたづらに時をぞ移しける。(巻二十七・御所囲事)

御所を包围するという「あらかじめの考え、計画」だけは実行した事について、「擬勢はこれまで」と言っているのであろう。

始めはさしも擬勢しつる吉田肥前、真先に橋を渡して逃げけるが、(巻三十六・秀詮兄弟討死事)

これは、先立つ軍議の場面で吉田肥前房殿覚が神崎橋を渡ることを主張したことを指す。これも本来的には「議論する、意見を主張する」の意味であり、状況との関係の中で「虚勢」の意味になると考えられる。

「あ」は、我討手を承つて向かはばや」と擬勢しつる者ども、相模守七百余騎にて控へたりと聞えしかば、興醒め顔に成りて、(同上、清氏叛逆事付相模守子息元服事)

これも結果的には「虚勢」であるが、「議論、意見、主張」の意味と見ることができる。

以上を要約すると、「義勢（擬勢）」の基本的な意味を、「議論、議論の趣旨（意見、主張）」とし、合戦などの場面で「議論、意見、主張」をそのとおりに実践できない状況がしばしばあるため、そのような場合に結果的に「義勢（擬勢）」が「虚勢」の意味となると考えると、用例の全体がシンプルに説明できる、ということである。一方、「見せかけ」等を基本的な意味として考えようとするれば、「議論、意見、主張」等の意味の用例についても、基本的な意味との連続性を見出す必要があり、そのために、たとえば「相

応の力や才能があると信じ込み」、「正しいと信じて」（前引、日本国語大辞典）のように、「主観的な（客観的には誤りであるかもしれない）」というニュアンスを認めることになる。しかし、実際の用例には、必ずしもそのようなニュアンスがない『法然上人絵伝』『盧談』のようなものがあり、それらを含めての説明には無理が生じるように思われる。さらに用例の探索と通時的な考察が必要であるが、ひとつの観点として提起しておきたい。